

ソ連時代を全く知らない若い世代の叛乱を示した「プッシー・ライオット」事件

「プッシー・ライオット」事件を日本の他紙に比べて多くの紙面で取り上げている産経は、8/27付で「世界規模の反露キャンペーン」(独立新聞-ロシア)、「反体制派の声は消せぬ」(タイムズ-英国)、「恥知らずの一步」(米紙ウォールストリート・ジャーナル-アジア版)の各論評を紹介している。

《ロシアの主要紙では、プッシー・ライオットの判決が批判に当たるものではないとの論調が目立つ。独立新聞が伝えた世論調査の結果でも、「裁判は公正かつ客観的に行われた」とする回答が44%のぼり、判決が「上からの発注」だったとする18%を大きく上回っている。

こうした心理を理解する上で、20日付の同紙が掲載した親政権派の政治学者、マルコフ氏の論文が一助となるかもしれない。論文は女性バンドの側に加担した反政権派をやり玉にあげ、反政権派の「急進化」と「グローバル化」を問題視したものだ。

マルコフ氏はこの中で、反政権派には今やロシアの文明的根幹を変える用意があり、だからこそ歴史的に国家と密接な関係を有してきたロシア正教会が標的になっていると主張。正教は事実上の「全国的イデオロギー」となっており、「今日、ロシア正教会が消失もしくは急激に弱体化した場合には、ロシア国家もじきになくなってしまう可能性が高い」と指摘する。

他方でマルコフ氏は、反政権派が資金・思想の面でますます外国に依存しており、外部勢力の目標は「ロシアを弱く、従属的な国にすることだ」の論理を持ち出す。外部勢力はロシア正教会に対する「グローバルなキャンペーン」を展開するために3人の裁判を利用したというのだ。

論文によれば、ロシア人は外国の著名音楽家らがプッシー・ライオット支援を表明するに及んで事の本質を理解し、それゆえに国内では逆に正教会への侮辱に対する批判が強まった。プッシー・ライオットの一件は「ロシア人をたたきのめし、ロシアの国家体制を根絶することを目的とした、教会侮辱のキャンペーンが続くかどうかの問題なのだ」。(モスクワ 遠藤良介)》

《英紙タイムズは、「クレムリンの復讐」と題する社説(18日付)を掲載し、プッシー・ライオットはプーチン大統領の逆鱗げきりんに触れて有罪判決となったが、ロシアの反体制派の声を消すことはできないと談じた。

同紙が取り上げたのは、1965年のソ連時代に2人の無名作家、アンドレイ・シニャフスキーとユーリー・ダニエルが反ソ連宣伝の文芸作品を外国で発表し、有罪となった事件だ。

ソ連最高裁で行われた裁判は、前年に改革、開放派の指導者フルシチョフを失脚させた最高指導者ブレジネフと当時、首相のコスイギンの保守派2人による政治ショーだった。

それは、ソ連共産党による思想統制が強化され、西側への窓を閉鎖すると同時に、「サミズダート」と呼ばれる発禁の地下文学や反体制派活動を生みだし、最終的に共産主義思想やソ連の崩壊をもたらしたと、同紙は主張した。

一方、3人の若い女性は、原色のマスクをかぶりミニスカートで反プーチンのパンクロックを救世主キリスト大聖堂で歌った。同紙によると、多くの信者を不快にさせることは分かっていたが、大統領が自分の権威への挑戦と受け取るとは思ってもいなかった。

ただ、社説は「ソ連国家保安委員会(KGB)出身の大統領は、先のソ連裁判が何をもたらしたかをよく知っている。だが、突如、湧いて出た若者の反体制活動に怒りを覚えた大統領が選んだのもやはり抑圧だった」と指摘する。

最後に、「大統領は外国で抗議の輪が広がるほどかたくなになる。反対に罰が厳しいと、若者が激しく反発する」とし、検察の禁錮3年の求刑に対し、判決が2年となったのは、「権力を恐れない野党がロシアに存在していることを示した」と締めくくった。(ロンドン 内藤泰朗)》

《21日付の米紙ウォールストリート・ジャーナル(アジア版)は、プッシー・ライオットをめぐる事件はロシア当局による反政権派への弾圧が新たな段階に入ったことを示しており、米国など民主主義国家に対し、具体的な行動でプーチン政権に「打撃」を与えるよう訴える記事を掲載した。

記事は、同紙の寄稿編集者で、ロシアの民主化グループの代表を務めるガルリ・カスパロフ氏が執筆した。同紙は、逮捕された3人は「悪ふざけの反プーチン“祈禱”」を行っただけで禁錮2年の有罪判決を受けたと指摘。その投獄はプーチン大統領が着々と進める「社会の安定を損なう行為への弾圧」の「次の必然的一步」だったと主張した。

その理由としてカスパロフ氏は、従来プーチン氏を批判する人物や政敵らは、テロや詐欺行為など「あらゆる偽の刑事責任」で投獄されていたと指摘。しかし3人は「(政治的主張により逮捕されたことで)ロシア初の本物の政治犯」になったとし、これまでの弾圧との違いを解説した。

しかし同氏は、そのような「恥知らずの一步」に対し、「自由(主義)世界のリーダーら」は極めて無関心だったと批判する。特に米国に対しては「政治演説へのあからさまな弾圧に対し、まるで懲役期間の長さだけを問題としているかのようだ」と糾弾した。

記事は、プーチン氏は西側メディアや著名人らの批判を「懸念してはならず」、彼とその取り巻きは「金と権力にのみ関心がある」などと主張。米国に対しては「(犯罪に関与したロシア政府高官らに経済制裁などを加える)法案への反対を取り下げるべきだ」と促し、「彼らが痛がる部分を打ち、彼らがいかなる悪党かを明らかにすべきだ」などと強調した。(黒川信雄)

メンバーのエカテリーナ・サムツェビッチにインタビューを行った産経のモスクワ支局長の佐々木正明は10/14付の「シャラポワとパンクバンドの未来」と題するコラムで、今年25歳のシャラポワと30歳のサムツェビッチがこれまでに辿ってきた人生を対比させて、ロシアの行く末を見つめる。

今年、「生涯グランドスラム」(テニス4大会制覇)を成し遂げたマリア・シャラポワは、1986年4月、原発事故が起きたウクライナ・チェルノブイリから約100kmしか離れていない故郷のベラルーシ南部の中都市ゴメリから放射能汚染を恐れて移住したシベリアの石油精製業の街で、事故直後に生まれた。以降は引っ越しの連続で、原発事故を「ソ連崩壊の真の原因」と語ったゴルバチョフ元ソ連大統領がソ連崩壊とともに退陣し、新生ロシア誕生に発足したエリツィン政権時のテニスブームに乗って、シャラポワは4歳の時、南部のリゾート地ソチでテニスを始め、6歳で米国に移住し、《93年、モスクワのイベントで元女王のナブラチロワに素質を見いだされ、名選手を育てることで有名なフロリダのボロテリー・テニスアカデミーでの育成を勧められる。父はここでも大決断をした。/この時期、多くのロシア人が国を捨て外国へ去っていた。父娘が大西洋を渡ったとき、所持金はたったの700ドル。父は皿洗いをして稼ぎ、レッスン費を賄った。両親の期待に応え、シャラポワは女王への道を駆け上がった。》

エカチェリーナ・サムチェイビッチ(コラムの表記)は82年、モスクワで生まれ、幼少期、《勉強が得意な真面目な女の子だった。しかし、彼女の人生にもソ連崩壊前後の混乱が影を落としていた。科学者の父親は大学を追われ、職探しに奔走。母親も懸命に働いたが、生活は困窮した。父親は「娘はこの国が壊れていく様をつぶさに見た。その体験が、自分の人生への強い意識を植え付けたのだと思う」と語る。/19歳の時、母が亡くなり、父娘2人となる。サムチェイビッチは大学卒業後、プログラマーとして軍事企業に就職。まもなく極東への転勤が打診されたが、父親が「国の外れに出すわけにはいかない」と反対し、結局、退職した。/暇を持て余したサムチェイビッチはリベラル系団体の活動に参加するようになった。関わるうちに、「市民から民主主義の権利を奪っている」と批判を受けるプーチン大統領への憎悪を深めていく。大聖堂で過激ライブを行ったのは、ロシア正教への批判からではなく、大聖堂が「宗教を利用して国を支配するプーチン政権」のシンボルと映ったからだ。》

シャラポワとサムチェイビッチは共に《ソ連末期に生まれた「時代の落とし子」》であり、前者は《人生の大半を自由と民主主義の国で過ごし》、祖国ロシアの代表になることを熱望してロンドン五輪の旗手を務めたのに対して、後者は「プッシー・ライオット」のメンバーとしてフリーガン(暴徒)罪で逮捕、起訴され、彼女自身は釈放されたものの、祖国ロシアを牛耳るプーチンに反旗を翻した。

《その生き方は対照的だが、両者の生き方に価値を見いだす国民層は着実に増えている。/ロシアでは、ソ連時代をまったく知らない世代が国の政治や経済を担っていく時代が、すぐそこまで近づいている。ポスト・プーチン時代のロシアがどのような国になっているのか。その予想は難しいが、彼女たちの歩む道は、多くの国民にも影響を与えてゆくことになりそうだ。》と、コラムは結ばれる。